



これは余が余の為に
頑張る物語である 3

文月ゆうり

Yuzuki Fumitsuki

RB

レジーナ文庫

ベル▲

新しくできた
リリの友人。明るく
元気な男子の子。

ララ▲

リリの友人。おっと
りしているが、人を見
る目はある。

▲□□

リリの友人で
黒髪の男子。頭がとて
もいい。

▲ルル

リリの想い人にして、
世界で唯一の存在である
神子。

▲リリ

転生先の異世界で幸せ追求中の、
自称“余”な女の子。
ルル様に恋している。

ニル

メル

▲精霊

赤ちゃんの頃、
リリの友達だった精霊。
あるときを境に
会えなくなっていたが……

▲シアン

リリの学校の先輩。
顔立ちは美しいが無表情で、
謎多き人物。

▲アル

リリの実の兄。
大精霊シルヴァーンと契約を
結んでいる。シスコン気味。

▲ルディ

パパが連れてきた少年で、リリ
のもう一人の兄。光る髪と目をも
っている。お菓子づくりが得意。

目次

これは余が余の為に頑張る物語である 3 7

書き下ろし番外編 新米守護騎士たちの語らい 349

これは余が余の為に
頑張る物語である 3

プロローグ

皆の者、元気であるか。余ことリリアンナであるぞ！

余、何と、本日六歳になったのじゃ。時間が経つのは早いものよな。もう、立派なお姉さんだの。

……うむ。そろそろ余口調が無理っぽくなってきた……気がするぞ！

そう、そうなのだ。今日で六歳ということは、今日はリリちゃんの誕生日というわけ。つまり、特別な日になるわけ——

今日はリリちゃんの誕生日パーティーが開催されているのですよ。ばばーん！

パーティーだよ、パーティー！ と言っても、招待客は少ない、小ぢんまりしたパーティーなんだけどね。リリちゃん、それでも主役だから、しっかりしないと！ 余口調、封印！

小規模と言いつつ、我が家の大広間での立食式のパーティーだ。

今までは家族だけでお祝いしてきたんだけど、私に友達ができたと、学校に通い始めたのを機に正式にお祝いしようという流れになったんだ。

こんなにちゃんとしたパーティーは、前世を含めて初めてだよ！

——そう。私には何と前世の記憶があるのだ。この世界とは違う、日本という国にいた記憶が。

前世の記憶があるなんて、リリちゃんすつごーい！ 崇め奉^{あがたてまつ}っても良いんだよ。

流石^{さすが}、子供様^{こどもさま}だねって！ てへっ。

閑話休題^{かんわきゅうだい}——うん、落ち着こう、リリちゃん。

私は、パーティー会場に視線を移す。

パパ、ママ、そして兄ちゃんたちがいる。

我が家で働いてくれている人たちの姿もあって、彼らはいつも以上にきびきび動いている。でも、皆笑顔だ。

前世の私には、家族はお母さんしかいなかった。だから、こんなにたくさんの人に囲まれてる今が、なんだか不思議にも思える。

この世界で、私はいっぱい出会いを経験した。そして、別れも。

私にはかつて、いつでも側にいてくれる友達がいた。

メル、ニル、ジルという名の三人の精霊。私がまだ言葉を話せなかった頃、彼らは毎日のように一緒にいてくれた。

ウエル・ナーラと呼ばれる、精霊が小さな赤子と交わす約束事をしていたから。でも私が成長し、その時期が終わって、会えなくなってしまうた。

別れは、本当に突然だった。

あれからも何年も経つけれど、まだ、心に残っている。

「……私、友達できたんだよ」

思いつきのなかの、精霊たちに語り掛ける。

私、ちゃんと幸せだから——

そう心で呟いて、私は大好きな人たちのもとへと歩いて行く。

私の六歳の誕生日は、賑やかで幸せに満ちている。

第1章 危険な課外授業

六歳の誕生日当日の今日、私はバッチリおめかしだ。頭にお花の飾りも着けてもらっている。ピンクのふわふわドレスも着用して、正に完璧だ。

「ママ、リリちゃん可愛い？」

我が家の家令であるアルベルトさんと話をしていてママに抱き付く。ママはもう三十歳なのに、全然そうは見えないほど若々しい。

金髪にバッチリ青い目で、とっても可愛いんだよ。リリちゃんは、そんなママにそっくりなのだ。ふふくん、将来はママみたいな美人さんになるよ！……多分。

「ふふ、リリちゃん。今日の主役なんだから、しっかりしないと」

「はあーい」

ママに、頭を撫でられちゃった！

「えへへー、リリちゃんお姉さんだから、しっかりするよー」

「偉いわ、リリちゃん」

ママに誉められた私は、胸を張る。えへん。
アルベルトさんが笑い皺じわの浮かぶ穏やかな笑みを私に向けて屈かんだ。

「リリアンナ様、本日はおめでとうございます」

「ありがとうございますー！」

元氣いっぱいにお礼を言う。淑女の礼儀なんて、身内の前では気にしない。

アルベルトさんも、更に笑顔になってくれた。

「リリアンナ」

あっ！ パパだ！ パパー！

今日のパーティーには、いつも忙しくしているパパも参加しているんだ！ 頑張っ
都合をつけてくれたに違いない。リリちゃん、うっれしーい！

パパは三十一歳で、神子みこ様を守る神護騎士団の騎士団長だ。凄い美形さんだよ。それ
でいてキリッとして常に冷静で、厳しさを溢れる雰囲気なものだから、皆に怖がられて
いるらしい。でも本当は、とっても優しいんだよ！

「パパー！」

パパに向かって走り出そうとして、すんでのところで立ち止まった。マズい。ひっ
じょーに、マズいですよ。

だって、パパの後ろにヴァルグランツ伯父さん一家がいるのが見えたんだもの。

伯父さんは、パパの十歳年上のお兄さんで、リリちゃんの家であるシウトワール家の
本家、ラグフェル侯爵家のご当主様だ。パパ以上に眼光鋭く、そして凄く厳格な人だ。
さつき、礼儀は身内なら気にしないとかなったけど、伯父さんだけは別なのだ。

ヤバイ。伯父さんの前で、パパとか言っちゃったよ！

「お、父様。何でしょう」

今更な感じだけど、言葉遣いを直す。本当に今更だけど、所作も淑女のものに変える。
落ちていた足取りで、パパに向かって歩く。

ああ、伯父さんの後ろで、伯母さんと従姉のウエルナお姉ちゃんが苦笑している。

伯母さんの腕には、もうすぐ一歳になる従弟のアルスカインが眠っている。アルスカ
インとリリちゃん、誕生日近いんだよね。

パパの横に並ぶと、そっと背中を押された。

「リリアンナ、兄上たちに挨拶なさい」

「はい、お父様」

パパ、パパ。リリちゃん、バッチリ決めてみせるよ！ 頑張るよ！

私は、着ているドレスのスカートを掴み、淑女の礼を取った。

「伯父様方、本日はわたくしの為に、ありがとうございます」

「うむ、リリアンナの健やかな姿が見られて、嬉しく思う」

伯父さん、重々しく頷いているけど、それ揶揄してますよね。さっきのパパに抱き付こうとした姿を皮肉ってますよね。うあちゃー。リリちゃん、失敗失敗。

パパが私の肩に手を置く。

「おかげさまで、リリアンナももう六歳となりました」

「月日の経つのは、早いものだな」

「ええ、本当に」

パパと伯父さんが会話を始める。ここからは大人の世界だ。私の成長についての話から、いつの間にか各国の情勢に話題は変わっている。うむ、リリちゃんついていけないや。

「リリアンナ」

ん？ 伯母さん？ 何ー？

「わたくし共のことは良いですから、貴女は貴女のお客様のもとに行きなさいな」

「そうよ、リリちゃん」

伯母さんとウエルナお姉ちゃんが促す先には、小さな影が二つ。

あ！ ララちゃんとロロくんだ！ きてくれたんだ！ わーい！

「お友達なんでしょう？」

「うん！ 仲良しなんだよ！」

ウエルナお姉ちゃんの問い掛けに、満面の笑みで答える。

あつ！ 素が出ちゃった。おおっと、パパと話しているのに、伯父さんの視線が！ 視線が刺さって痛い、痛いよ、伯父さん！

「……えーと、わたくし。お友達のもとに行きますね。皆様、どうか楽しんでいらしてね」

伯父さんの視線にビクビクだ。

「ええ、行つてらっしゃい」

腕のなかのアルスカインをあやしなから、伯母さんがそう言ってくれた。

「では、これで」

伯父さんの視線から逃げるようにして、私は友人たちのもとへと歩き出す。走っちゃ駄目。走っちゃ駄目。

ララちゃんとロロくんは、大広間の入り口近くに立っていた。きたばかりのようだ。

「リリちゃん！」

「ララちゃん、ロロくん！」

笑顔で私を呼んだララちゃんの隣で、ロロくんが控えめに手を振っている。私たち三人は同じ年で、学校ではいつも一緒の仲良しなんだ。

ララちゃんの本名はミディララ・ルー。とっても可憐な女の子だ。栗毛はふわふわしてて、ふんわりとした雰囲気のララちゃんにその髪はよく似合っている。

今日着ている白いワンピースも、愛らしいよ！

「リリちゃん、今日はお招きありがとう。あの、これ」

ララちゃんが、可愛くラッピングされた包みを私に差し出してきた。えっ、これプレゼント!?

「良いの!? ありがとう!」

「リリちゃんに似合いそうなりボンなの。気に入ってもらえると嬉しいな」

はにかむララちゃんに、私はぶんぶんと首を縦に振る。

絶対、気に入っちゃうよ。なんだって、ララちゃんの見立てなんだから！

「リリ。僕からは、これを」

ロロくんは掛けている眼鏡を直しながら、シンプルに包装された四角い包みを私にくれた。ちよつと重いぞ。何だろー。

「……リリは、精霊使いになるんだろ。だから、精霊に関する本が良いかと」

「さっすが、ロロくん！ ナイスなチョイスだよ」

「言っていることは分からないけど、喜んでくれてるのは分かった」

ロロくん、クール！

ロロくんの本名は、ユリウス・エル・ロロウエン。ロロウエン伯爵家の次男坊だ。

ロロくんは紫の目に、黒い髪を持ち主である。そう——黒髪。

私たちの暮らす世界で、黒髪は特別な意味を持っている。かつて、黒色と呼ばれた人々が世界に争いをもたらしたことがあった。その為黒い色をその身に宿す人たちは、今でも迫害の対象となっている。ディーン王国は黒色の争いに直接巻き込まれることはなかったから、それほど強い拒絶反応はないけれど、それでもロロくんは、学校の皆から遠巻きにされていた。

でも、私とララちゃんは違ったのだよ、ふふふーん。縁^{えん}あってロロくんと知り合った時に、ちよつと強引に友達になつてもらったんだ。

あの日から、私たちは友達だ。ロロくんと親しげに呼べるのは、私たちの特権だと思っている。

「ララちゃん、ロロくん。ありがとう!」

二人からのプレゼントを両手で抱え、私はお礼を言う。あー、幸せだー。

「余は、得難き友を得たのだな」

うむうむと、満足げに頷いていると、ロロくんが怪訝そうな顔をした。

「何、言ってるんだ」

あ、しまった！ つい、余言葉が出ちゃった！ 封印したばかりなのに！

リリちゃんこんなだけど、実はばぶばぶ言っていた赤ちゃんの頃から自我があった。ゼロ歳児の時は、暇で暇で仕方なかったんだよ。何せ赤ちゃんだ、喋れないし自由に動けないしで、何もすることがなかった。

それで編み出したのが、余言葉ごっこ。

余口調でちよつと偉そうなキャラクターに成りきる遊びを始めたのだ。元ネタは、前世で好きだったアニメの主人公の口調なんだよ。あのアニメには凄くハマってたなあ。

因みに、ロロくんはそのアニメに出てきた、双剣使いのリオル様にそっくりなんだ。リオル様、カツコイイよ！

……じゃなくて、何とか誤魔化さないと！ リリちゃん、変な子だと思われちゃう！

「余、余は、じゃない、私は君たちと友達で本当に良かったと思ってるよ！」

「……」

無言が痛い！

「え、へへ……」

ララちゃんとロロくんは、引きつって笑う私を見た後、お互いに顔を見合わせた。

「……私たちも」

「……友達で良かったと思ってる」

スルー！ 二人は、スルースキルを発動しようだ。何て良い子たち。ほろり。

リリちゃんのお口が、つるつるなのがいけないのだけどね。リリちゃん、お口滑りすぎ！

「ま、まあ、今日のご馳走もたくさんあるから、楽しんでいってね！」

「うん」

「分かった」

ララちゃんとロロくんは、後からきたメイドさんに案内されていった。また、後で絡みに行くからねー。

「さて……」

二人を見送った私は、パーティー会場を見渡す。

周囲を使用人さんたちが給仕に忙しく動き回っている。

「おー、いいいた」

会場のすみっこに、固まっている二人を発見！ 仲良しなのか、ただ単に伯父さんが怖いのか。……たぶん両方だな。

とたとたと、私は目当ての人物たちのもとへと歩く。走っちゃ駄目。会場内に伯父さんいるからね！

「兄ちゃんたちー！」

声を掛けると、二人はあからさまに肩をビクつかせた。警戒してるなあ。

目の前には、大好きな兄ちゃんたちがいる。

「な、なんだ。リリかよ」

と顔を青くしているのは、ルデイ兄ちゃん。本名はルデイガイウス、十三歳。

「驚かさないでよ」

と言つて、胸をなで下ろしているのは、アル兄ちゃん。本名はアルトディアス、同じく十三歳。

二人とも同じ年だけど、双子じゃない。ルデイ兄ちゃんの方が、私が赤ちゃんの時に我が家に引き取られたのだ。だからルデイ兄ちゃんは、私とアル兄ちゃんとは血が繋がっていない。でも私たち三人は大の仲良しだ。

ルデイ兄ちゃんは、濃い青色の髪に濃い緑色の目を持つ、女の子みたいに可愛い美少年。

年。まあ、最近はこちらとは男らしさが出てきた、かな？ ルデイ兄ちゃんの髪と目は、光るんだよ。キラキラするの。そういうのつて、精霊色つて言うんだ。精霊に祝福されている証なんだよー。

そんなルデイ兄ちゃんの相棒でもあるのが、アル兄ちゃん。

アル兄ちゃんは、大精霊シルヴァーンと契約——シルデイ・ナーラー——をしている。

次期神護騎士団の騎士団長様でもある。

ルデイ兄ちゃんと一緒に。パパの右腕になるんだつて、今から張り切ってるんだ。

そんな自慢の兄ちゃんたちだけど、残念ながら今、二人はこそこそ小さくなっている。苦手な伯父さんに見つかりたくないんだね。

「……兄ちゃんたち、挙動不審だよー」

まったく、呆れてしまう。いつもの、爽やかな二人は何処行つたの。

「うるせーよ」

「今の僕らには、逃げも必要なんだ」

そんなことを、二人は真顔で言う。伯父さんへの苦手意識は相当深いようだ。やれやれ。兄ちゃんたちは、リリちゃんを見習って堂々とするべきだよ。

……あれ、リリちゃんも、伯父さんから逃げてきたんだっけ？ うん、それはこの際、

忘れよう。

「……でも、逃げ切れないと思うなあ」

私は、確信を持って言った。

「リリ?」

「それは、どういう意味だ」

兄ちゃんたちは、食いついてきた。

「だって……」

「アルトディアス、ルデイガイウス」

私が説明する前に、兄ちゃんたちが声が掛かってしまった。

あのね、パパが息子たちを放っておく筈(はず)じゃないですかー。

というわけで、兄ちゃんたちにはパパから招集(まじ)が掛かりました。パパの側には、勿論(もちろん)

伯父さんがいます。

「マジかよ」

「父上……」

兄ちゃんたちは、半ば呆然とした様子で眩(くら)んでいる。

「ほらほら、パパが呼んでるよー。早く行かないと」

「くそー」

「仕方ないよ、ルデイ」

兄ちゃんたちは、肩を落としてパパと伯父さんのもとへと歩いていく。足取りは重い。

「兄ちゃんたち、頑張れー!」

とりあえず、私はエールを送っておいた。

さて、ララちゃんたちのところへ戻ろうかな。

お腹(はら)もすいてきたし、一緒にテーブルの上にある美味(おい)しそうな馳走(ちそう)を食べるのも良
いかなあ。

「お嬢様、ご学友様からのプレゼントお預かりしますよ」

「あ、ありがとうございます」

そんなことを考えていたら、メイドさんが私に声を掛けてくれたので、ララちゃんたちからのプレゼントを渡した。後でじっくり見ようっと。

メイドさんを見送った私は、改めてテーブルに目をやる。やつぱりお腹すいてるや。

喉(のど)も渴(かわ)いたし。と、思っていると、目の前にジュースの入ったグラスが現れた。まさか、

魔法!? リリちゃん、魔法使えちゃったの!?

「お嬢さん、飲み物をどうぞ」

……そんなわけないか。私にグラスを差し出したのは、ジェイドさんだった。
 「ジェイドさん、ありがとうございます」
 今日も赤毛が眩しいですね！

ジェイドさんは、パパの騎士団の団員で、爽やかな外見に反して、お腹は真っ黒さん。
 そして、凄い秘密を持っている人なんだ。

私はジェイドさんからグラスを受け取り、早速飲んだ。美味しー。

「お嬢さん、誕生日おめでとうございます」

「ありがとうございます」

「今日は、騎士団を代表して俺がきたんですよ」

そうなんだ！ まあ、そうだよな。身内だけのパーティーに、騎士団の人たち皆はこられないよね。

ジェイドさんは、そっと身を屈ませた。手には、ラッピングされた小さな箱が載っている。

「これは、あの方から」

「あの方って……」

「決まってるでしょう？」

片目を瞑るジェイドさん。ということとは、あの方って……ルル様だ！

私は目を輝かせて、箱を受け取る。

ルル様、プレゼント用意してくれたんだ……。どうしよう、嬉しくて涙が出そうだ。

「ジェイドさん、ありがとうございます！」

「いえ、俺は持ってきただけなので」

それでも、お礼を言いたい。私とルル様を繋いでくれたことに。

ルル様——。そう、この人こそ、精霊教会の教主である神子様だ。パパの騎士団が護っている存在で、そして、私の想い人……

ルル様はこの世界に一人しか存在していないという、二色持ちだ。二色持ちとは、精霊色を二色、その身に宿す存在である。髪と目のように、一人の人間に二ヶ所光るところがあり、それを特別に聖霊色と言う。聖霊色を持つこの世界唯一の存在が神子様だ。ルデイ兄ちゃんも髪と目が光るけど、あれは二色持ちとは違うらしい。色々複雑なんだな、うん。

そんな凄い存在であるルル様は、普段、パパやジェイドさんに守られて自由に行動することはできない。それなのに、私の為にプレゼントを用意してくれたなんて！ 多分、ジェイドさんに頼んだのだろうけど、私の為に何かをしてくれたことがとにかく嬉しい。

「あ、開けても良いですか！ 良いですよね！」

「はいはい」

ジェイドさんに苦笑されるなか、私はいそいそと箱を開ける。入っていたのは、鳥を象かたどったペンダントだった。

「うわあ、可愛い！」

はしゃぐ私に、ジェイドさんが耳打ちする。

「……鳥にしたのは、羽ばたいていつでもお嬢さんの側にいけるように、という意味があるとか」

「え……！」

驚く私に、ジェイドさんはいたずらが成功した子供みたいな顔をする。

「はは、お嬢さん。顔、真っ赤ですよー」

「う、うるさいですー」

うう、不意打ちだ。ほっぺ熱いよー。

「では、確かにお渡ししましたからね。俺は、帰ります」

「もう、ですか？」

ジェイドさんは、笑みを浮かべた。意地悪なものではなく、心からの笑顔だ。

「妻と息子が、家で待ってますからね」

「あ……」

そうだった。ジェイドさんにはこの間の秋の終わりに、男の子が生まれたのだった。まだ会ったことはないけど、きっと可愛いんだろうなあ。

「なら、仕方ないですね」

「ええ。愛妻と愛息子まなむすこは強いです」

ジェイドさんはそう言うと、私にお辞儀をする。

「では、お嬢さん。俺は、これで」

「はい、今日はありがとうございましたー」

私は、ジェイドさんに手を振る。

家族サービス、頑張ってくださいねー！

「ジェイドさん、変わったなあ」

見送りながら、私はぼつりと呟いた。何だか、落ち着いた気がする。それはやっぱり、家族の存在が大きいんだらうなあ。

私も、優しい家族に囲まれているから分かる。家族がいるって、最強なのだ。

「ふふーん」

私はペンダントを目の前にかざす。
ルル様からのプレゼント。幸せだ。

「いつでも側に……か」

ルル様の言葉に私は微笑んだ。

+

誕生日パーティーの後は、ララちゃんと我が家で遊んだ。ロロくんは予定が合わなくて、先に帰ってしまった。残念！

お気に入りのぬいぐるみであるうさしやんやくまさん、それにねこさんに埋もれたりして楽しんだ。まだまだ子供様ですからねー。

「ねえ、リリちゃん知ってる？」

みにょーんと、ねこさんの頬を引つ張るララちゃん。

「何がー？」

負けじと、私もうさしやんを引き伸ばす。むによー。

「もうすぐ、またロロくんのクラスと課外授業があるんだって」

「ほほう、何やるんだらうね」

前回は、リプロの花の採取だった。低学年の授業だから、また採取系だらう。皆と学校の外に出るのは楽しい。でも、こんな寒い季節に取れるものってあるのかなあ？

「なんかね、上の学年の先輩との親睦しんぼくを兼ねて、雪遊びするんだって！」

「雪遊び！」

それは楽しみだ！

あれ、でも我ががディーン王国は四季がはっきりしているけど、あんまり雪は降らないよ？

私の疑問が伝わったのか、ララちゃんがつこり笑う。

「雪月の丘せつづきっていう、ラーズの季節になると自然と雪が積もる場所があるんだよ。凄く寒くて、綺麗な場所だよ」

口振りから察するに、ララちゃんはその丘に行ったことがあるようだ。良いなー。

雪月の丘かあ、どんな場所だらう。

ララちゃんが帰ったあと、私は本でその丘について調べた。
ソファーに座り、ページをめくる。

「あ、あった」

雪月の丘は、もとは月が綺麗に見える、ただの丘だった。それが、ある日一人の魔法使い——恐らくは王宮に仕える魔術師だろう——が、丘に魔法陣を描いた。大きな魔法陣を。

彼が何の為に、そんなことをしたのかは分からない。何かの研究をしていたのかもしれない。

魔法陣は輝き、丘全体を照らした。

そして、丘に雪が降る。その雪は、丘全体に降り積もった。真っ白に染まった丘は、魔法陣が消えても、毎年ラーズの季節になると雪を積もらせるようになったのだ。以来、丘は雪月の丘と呼ばれるようになったという。

「うむ、ファンタジー」

流石、さすが精霊や魔法のある世界。リリちゃんの中の日本人魂がはしゃいでしまうよ。魔法、スゲー！

「課外授業、たつのしみー！」

私は本を掲げ、きゃほーいとソファーに倒れ込んだ。

というわけで先ほどの授業で、先生から課外授業の話を書きましたよー！ やほーい、

雪遊びー。

それで、一緒に遊んでくれる先輩はラッツフェル高等学校の方々らしい。それも、兄ちゃん達と同じ年齢の！

どんな人が私たちの相手をしてくれるのかな？ わくわく。

「ララちゃん、ロロくん。同じチームになろうね！」

「うん！」

「……ああ」

お昼時間、中庭でお弁当を食べながらそんな話をする。寒くても、中庭です。子供は風の子！ コートぬくぬく。

ああ、楽しみだなあ。雪遊びって、何するんだろう。雪合戦？ 雪像作り？ わくわくだなあ。

三人でわいわい話していると、一人の少年が近付いてきた。

その子は綺麗な深緑の髪をしている。学校に通い始めてから気付いたけど、変わった髪色を持つ子って結構いるんだよね。白銀とか。

おっと、今は目の前の子に集中しなきゃ。見覚えのある顔だ。えーと？

男の子は、ロロくんを見ている。緊張しているようだ。ロロくんに用事なのかな。珍

しい。

ロロくんは黒髪だから、未だに皆に怖がられている。黒色への忌避は、やっぱり根深いものがある。だから学校の皆は滅多にロロくんに近寄らないんだ。

「君は確か、同じクラスの……ベルファアくんか」

ロロくんは、少年を知っているようだ。

少年は、こくこくと頷く。

「ああ、ロン・ベルファアだ。知ってたんだ……」

「クラスメイトの名前なら、一通りは」

ロロくんは、事もなげに言う。流石、ロロくん！

ロンくん——いやロロくんと被るな。ややこしいからベルくんでもいいか。ベルくんは、顔を赤くして、両手を握り締めた。

「あ、あの、俺さ……っ」

「ああ」

ベルくんの顔が更に赤くなる。相当緊張しているようだ。何だかよく分からないが、頑張れ！

私の心のなかの応援がきいたのか、ベルくんは必死な様子ながらも先を続けた。

「君に、お礼が言いたくて！」

「お礼？」

ロロくんは怪訝そうに問い返したけど、私はピーンときちゃった。

「前に、宿題！ 教えてくれたから！」

やっぱり、そうか。以前、ちよつとした拍子にロロくんは彼に宿題を教えたことがあるんだよね。リリちゃん、見ていたから覚えてるよ！ ベルくんは、恩義を感じるタイプなんだな。

ベルくんの真剣な表情に、ロロくんはたじろぐ。

「い、いや。別に、お礼なんか……」

「でも、助かったから！」

そう言うと、ベルくんは笑った。太陽のような真っ直ぐな笑顔だ。

「ありがとう！ 時間経っちゃったけど、やっと言えたよ」

素直なお礼の言葉に、ロロくんは少し俯く。戸惑っているのだろう。

「じゃあ、俺行くな！」

ベルくんは、すっきりした顔で手を振る。だけど、立ち去る前にロロくんをもう一度見た。

「また教室でな、ユリウス！」

そう言って、今度こそ去って行く。ロロくんは目を丸くして、遠ざかるベルくんを見ていた。

「ほほーう」

「ベルくんは、なかなかやるね」

私とララちゃんが笑いながら言うと、ロロくんは困ったように私たちを見てきた。

「……あれは、いったい？」

途方に暮れるロロくんに、私たちは小さく笑い声を上げる。だって、嬉しくて！

「あれはね」

「ロロくんと、友達になりたいってことだよ！」

私たちの言葉に、ロロくんはぽかんと口を開けた。

良かったね、ロロくん！

+

遂にやってきた、課外授業ー！ 雪月の丘です。寒いです。そして……

「雪だー！」

眩まぶしいほど真つ白な雪原にダイブ！ だけど、一瞬で我に返る。

「つめたーい！」

冷たっ！ 雪、半端なく冷たい！ てか痛い！

「当たり前だろう」

ロロくん、呆れ顔だ。腕を組んで、雪のなかに埋没している私を見ている。ロロくん、

クール！

「リリちゃん、大丈夫？」

ララちゃんが、私を雪のなかから引っ張り出してくれた。ララちゃん。

私たちは今、学校から支給されたコートを着ている。私たち幼等学校生は、水色。高等学校の先輩たちは、青色のコートだ。フードにモコモコが付いてて可愛いよ。手袋も完備。

「本当に、雪だあ……」

ディーン王国は雪が降る日はあるけど、あんまり積もらないから、新鮮だ！

前世でも、あまり雪の降らない地域に住んでたからなあ。雪って、いつ見ても珍しく感じてしまう。

「はい、皆さん！ 四人一組になってくださいー！」
先生が、ばんばんと手を叩いて皆の注目を集める。

四人一組か。まずは、私たち三人でしょ。あと一人はどうしようか——そう悩んでいたら、とある人物が私たちの方に駆け寄ってきた。あ、雪に足取られて転んだ。

「冷たっ！ あ、ユリウスに君たち！ 俺と組もうぜ！」

そんなことを平然と言ったのは、ベルくんだ。ロロくと彼は、今やすっかり友達である。

「ベル、良いのか？」

それでも、ロロくんは氣遣わしげに尋ねる。黒髪の自分にかかわることで、ベルくんが孤立しないかを心配しているのだ。

でも、ベルくんは、そんなロロくんの弱気を笑い飛ばした。それはそれは眩しい笑顔で。

「友達なんだから、気にするな！」

「ベル……」

ロロくんが、声を震わせる。

ロロくんにとって、ベルくんは新しい世界だ。だからまだまだ、照れ臭いのだろう。

「ベルくん、ありがとう」

「これで、私たちは運命共同体だよ！」

言葉にならないロロくんの代わりに、私たちがお礼を言う。

「運命共同体って、何か大袈裟おおげさだなあ」

ベルくんは苦笑した。何か変なことを言いましたかね。こちら真剣ですよ？

「リリちゃん、カッコイイ」

「てへー」

ララちゃんに誉められ、私は胸を張る。

「……お前ら、変」

ベルくん、何だとー！

「私の偉大さが分からないなんて！」

「リリちゃんは、凄い子なんだよ？」

私とララちゃんは、ベルくんに抗議した。

「ユリウス、苦労してたんだな……」

「言うな」

二人とも酷い！

まあ、なんだかんだで無事にチーム結成となりました！ やったね！

「はい、じゃあ。くじを引いてください。くじに書かれた記号と同じ記号の腕章をしたお兄さん、お姉さんと遊んでもらいますようね」

そうか、くじを引くのか。ならば、ここは……

「ロロ將軍、どうぞ」

「待て、リリ。誰が將軍だ」

「ロロくん？」

「何故、僕に聞く！」

「そこにロロくんがいるから」

「意味が分からない！」

私とロロくんのやり取りを、ララちゃんとベルくんが見ている。

「なあ。あいつら、いつもああいう感じなのか？」

「うん。楽しそうだよね」

呆れるベルくんは、ララちゃんは笑顔で答える。うん、楽しいよー。

「僕は楽しくない！ 全然だ！」

ぷりぷり怒りながらも、ロロくんはくじを引きに行ってくれた。律儀さんめ。

「俺、シュトワール家の子でもっと特別だと思ってた。黙っていれば、リリって相当可愛いし……。皆、見た目と、外面そとづらに騙だまされてる」

ベルくんがガツカリしたように言うので、反論させて頂きます。

「ふむ。私だって、猫ぐらい被るよ。ただ、必要のない時は被らないだけで」

「私は、今のリリちゃんが好きだよ」

「ララちゃん！ 私も好きだよ！」

らぶらぶな私たちを見て、ベルくんは何故か軽くため息を吐つきつつも「そっか、そうだな」と納得してくれたようだ。

「おい、引いてきたぞ！」

ロロくんが、まだぷりぷりしながら帰ってくる。でも、気にしない。

「記号何ー？」

遊んでくれるお兄さん、お姉さんにかかわる重要なくじだ。私は、ゴクリと喉のどを鳴らす。

「……星だ」

ロロくんが見せてくれたくじには、確かに星のマークが描かれている。

星の腕章を着けてる先輩は――

「あ、あの人……」

私は、ララちゃんの視線を追う。その先にいたのは、雪に反射して輝く白銀の髪を持つ――シアン先輩だった。

何の感情も映らない瞳で、周りを眺めている。シアン先輩の腕章の記号は星だ。

……マジ、ですか？

星のマークは、シアン先輩の他にもう一人、おっとりした女の先輩がいた。

「今日は、よろしくね」

「……」

前が女の先輩で、後がシアン先輩である。シアン先輩、やる気なした。あらぬ方向を見ている。ぬう。

「先輩、よろしくお願いします」

それでも、私たちはべこりと頭を下げる。息が白い。足元の雪がよく見える。

「じゃあこれから、どうしようかしら」

「……」

女の先輩が言うものの、シアン先輩は完全無視だ。協調性がないにも程がある。

女の先輩も困っているし、私たちも不安になってきたぞ。

よし、ここは私の出番だ。

「はい、先輩！ うさしやん……雪で、うさぎ作りたいです！ おっさいやつ！」

雪の上で、ぴよんぴよん跳ねて主張する。おっと、ペしよつと転んでしまった。すぐ様、ララちゃんに助けられる。ありがと！

女の先輩の顔が輝く。

「雪像ね！ それは、楽しそう！」

「俺、雪初めてだから、何でも良いよ」

ベルくんが、目をキラキラさせながら足元の雪を見る。

「僕も、それで構いません」

「私もー」

皆が同意してくれるなか、シアン先輩はやはり無言だった。むうう。

雪像作りは、先輩たちが見守るなか行われることになった。私とララちゃんは、一緒にうさしやんとねこさんを作ることになった。時間があれば、くまさんも作りたいところだ。

ロロくんたちは、男の子の夢、初代国王である英雄王の雪像を作ると張り切っている。そちらは難易度が高いからということ、女の先輩が付いていった。女の先輩は、ロロくんの黒髪を怖がらないので良い人だ。

まあ、必然的に私たちにはシアン先輩が付くわけだけど、先輩は素知らぬ顔で近くの木に凭れ掛かっている。うぬう。良いもん、二人だけでもできるもん。

ころころと雪玉を転がす。この作業、小さな体には意外とつらい。でも私は、雪だるまなうさしやんを作るのだ！

「うさしやん、うさしやん」

「ねこさん、ねこさん」

ララちゃんと二人、口ずさみながら雪玉を作る。ふふうん。

ロロくんたちは、雪をこんもりと山にしていって。雪山にして、それを削って形を作る戦法か！ なかなかやるな！

周りでは、雪合戦が行われている。とても楽しそう。投げた雪玉がこっちに流れてこなければだけど。

「あぶっ！」

ほら、頭に当たった！ 雪合戦、怖っ！

しかし、雪合戦組。雪を固めて盾にしたりと、凝ってるな！。

良いな！。私たちもあんな風に遊びたいなあ。

でも、無理かな。シアン先輩、興味なさそうだし。と思って、シアン先輩のいる方を見た。

「……いない」

シアン先輩の姿は、何処にもなかった。何ということだ。現場監督を放棄するとは、けしからん！

——そんなに私たちのお守りが嫌だったのかなあ。しょんぼり。

「リリちゃん、気にしちゃ駄目だよ」

私の落ち込みに気付いたララちゃんが、慰めてくれる。

「……あの先輩は、世界が嫌いなのかな？」

ララちゃんが、ポツリと呟いた。

「ララちゃん？」

「何となく、そんな気がしたんだ」

ララちゃんは、人の気持ちに聡い。そんなララちゃんが言うのなら、そうかもしれない。

「世界が、嫌い……」

それは、いったいどんな感情なのだろうか。

「できたー！」

「わーい」

日の光を浴びて、並び立つ二体の雪像。キラキラと光るうさしやんとねこさんだ。私たちの背丈ほどの、あまり大きくない雪像だけど、それでも頑張った！

二人で万歳をする。

「あら、見事ね」

女の先輩が、にこにここと笑いながら私たちの方にきた。

「うさしやんとねこさんなんですよー」

「まあ、上手ね」

先輩に頭を撫でられた。てへー。

口口くんたちの方は、まだまだ掛かりそうだ。

英雄王の雪像だもんね。二人とも頑張れー！

と、私たちが和んでいる時だった。

「キヤーー！」

突如悲鳴が響き渡った。

私は悲鳴のした方を見て——そして、言葉を失った。

白い雪のなかに、異質な色。

黒い体躯の獣が、十頭程ゆっくりと歩いてこちらに向かってくる。赤い目をした獣は、見た目は狼に似ていた。でも、凄く大きい。普通の狼より、二回りは大きいと思う。

「ぐるぐる……っ」

獣の唸り声が響く。……あれは、何？ 普通の獣じゃないのは確かだ。

怖い！ 得体の知れない恐怖が、体中に広がる。

「魔物、だ……っ」

誰かの震える眩きが耳に入った。

魔物……!?

えっ？ 何で魔物が、こんな……。だって、ディーン王国はルル様のお膝元、で。神様が護ってくれているから、魔物はあまりいない筈、で……。何で……。さっきまで、あんなに——

「ひ……っ」

「きゃー！」

恐怖は、伝染した。幼い生徒たちが、次々と叫び声を上げていく。

その悲鳴で我に返ったのは、先生たちだ。

「幼等学校の生徒は、先輩たちの側から離れないで！」

「高等学校の生徒は、防衛魔法の発動を！」

「は、はい！」

先生の命令に、先輩たちが応える。

「貴女たち、こっちへ！」

女の先輩が、短く呪文を唱える。そして右手を翳すと、魔法陣が浮かび上がった。魔法陣を中心に円形の光が、私たちを包み込む。それを見て、こんなタイミングではあるけど、私はラツツフェル高等学校は魔法も学ぶのだと思いい出していた。

「貴方たちも、早く……っ！」

先輩が、離れたところにいるロロくんたちを呼ぶ。

ロロくとベルくんは頷き、こちらへと走り寄ろうとした。瞬間――

「がるるっ！」

魔物たちが一斉に走り出した。その内の一匹が、ロロくんたちへと向かって行く。

「う、わ……っ！」

ベルくんが悲鳴を上げる。雪に足を取られ転んだのだ。ロロくんが足を止め、振り返りベルくんのもとへと走る。

そこからは、スローモーションみたいに見えた。

ベルくん飛び掛かる魔物の前に、ロロくんが飛び出して。そして――

「ロロくん!!」

私は、力の限り叫んだ。

気付いたら、ぎゅっと目を瞑っていた。

恐怖で体が震える。最悪の事態が、私の頭を過った。

「ぎゃん！」

しかし、聞こえたのは人の声ではなく、魔物の悲鳴だった。

「え……?」

驚き目を開ければ、雪原の眩しさに一瞬目が眩む。何とか目を凝らしてみると、ロロくとベルくんの姿が見えた。二人とも無事だ！

そしてロロくんたちを襲おうとした魔物はどうと、雪原に転がっている。苦しげにのたうち回っていたが、その黒い体躯から淡い光が放たれ、やがて輪郭が崩れていった。

そういえば魔物は致命傷を負うと、光の粒子となり消え去るのだと授業で聞いたことがある。

魔物が、倒された——？

周りから歓声が上がった。一匹とはいえ、魔物が消え去ったのだ。

倒したのは——ロロくん!?

ロロくんは、ハッハッと荒い呼吸のまま、右手をつきだした状態で固まっている。右手には、光を放つ魔法陣。何と、ロロくんは魔法を使ったのだ。

そうだ、黒い色を持つ者は総じて魔力が高い。ロロくんも高い魔力を持つ筈で、だから彼は魔法の訓練をしてきていたのだろう。その身に宿る強い力を制御する為に。

「貴方たち、今の内にこちらに……っ」

魔法で防壁を展開する先輩が、ハッとしたように言う。

そうだ！ 気を抜いている場合じゃない！

「ロロくん！」

呼べば、ロロくんが私を見る。呼吸が荒いままなのは、魔物に襲われそうになった恐怖故か。

しかし、私はそんなロロくんの様子よりも気になることがあった。

ロロくんの目、光ってる……？ 深い紫の目が、徐々に色味を変えていく。

まさか、ロロくん……それは、精霊色？

「ロロくん、ベルくん、こっち！」

ララちゃんが叫ぶ。その声に、私の意識が引き戻された。そうだ、今はロロくんたちの安全の方が大事だ。

ロロくとベルくんが、体を私たちに向けた時だった。

「がうっ！」

一匹の魔物が吼えた。すると、今度は残りの魔物が周りの子たちにも襲い掛かる。

「きゃあ！」

「ぐ……っ」

周りの子たちも、私たちと同じように先輩に防壁を展開してもらっている。でも、魔物に体当たりされて防壁が大きく歪み、悲鳴が上がる。

「ロロくん！ ベルくん！」

ララちゃんの悲鳴が上がる。またも、魔物の一匹がロロくんたちに向かって行ったのだ。

「く、この……っ」

ベルくんを庇^{かば}うようにして、ロロくんが右手を魔物に向ける。
「光よ——」

ぶわっと、魔法陣がロロくんの手のひらに浮かび上がる。そこから、矢の如く無数の光が飛び出す。それは、全て魔物に命中した。

「ギャウン！」

魔物の悲鳴。そして、また光の粒子が変わっていく。

ロロくん、凄い！ また、やつつけた！ 強い！

「はあっ、は……っ」

ロロくんは、荒い呼吸を繰り返している。

魔法、使うの辛いのかな。もしかしたら、魔法って体力とか精神力を使うのかもしれない。まだ子供であるロロくんには、負荷がありすぎるのかも。

よろめくロロくんを、ベルくんが支える。

ロロくんたち、早く、早く私たちのところに！

他の先輩たちも、苦戦しているようだ。人を守りながら戦うのって、難しいだろうか。殆ど^{ほとんど}の先輩が防衛に徹していて、攻撃に転じることができないようだ。

先生たちがロロくんのように魔法陣を展開して攻撃しているけど、人数が少なすぎる。

それに、魔物は何処^{どこ}から湧いてくるのか、数が増えていた。先生たちが倒しても倒しても、一向に減らない。どうしたら良いのだろう。

増えた魔物は、今まで攻撃を仕掛けていなかった防壁へと走ってくる。つまり、私たちの方へと。

ドオンと体当たりされ、防壁が歪む。間近で見える魔物は、赤い目をぎらつかせ、私たちを睨^{にら}み付けていた。鋭い牙や爪に、私のなかに恐怖心が芽生える。怖い。怖い、助けて、誰か。

「く、う……っ」

先輩が呻^{うな}く。辛そうだ。私とララちゃんは、最悪の事態を想像して抱き合う。二人の震えが互いに伝わり合い、それが余計に恐怖を煽^{あお}った。

「がああ……っ！」

ところが突然、目の前の魔物が崩れ落ちる。ドサツと雪に沈み、体からは光の粒子が浮かんでいく。

「助かった……？」

「ロロくん……っ！」

ララちゃんの声に、ロロくんを探す。ロロくんは、ベルくんを巻き込むようにして、